

○四月に入り来る。気温忽ち昂へあがゝつて夜寝ね苦し。五体の懈怠尋常にあらず。夢みるところ故國の知人。これ病身の一徴なり。(一日)

へ○次、松原秀一以下三〇人の氏名を連記し、頭に部隊を示す数字を添えている。いろいろマークをつけているが何のために使ったものか。自分の氏名も記している。ゝ

○鏡第六八一六部隊 福島県郡山市堂前町二九 阿部正 東京市神田区松富町一六 佐久間四郎

○士官殿より種々身に余る御好意を受け恐縮至極。菓子煙草等を戴いた事は兎も角として、士官殿の衷心より発する温情に接しては、何とも御礼の申様無し。人情の厚誼さ、地方にありて一艸舎同行より享受して以来、こ□を渴望すること実に久し。士官殿、元来蒲柳の質、前途の御健全を祈るや切なり。(二〇、四、七)へ今けの士官の名も思い出せない。漢口でのように記憶する明大出の士官が或いはこの人かもしれない。ゝ

○気温の激変爽に甚し。数日前素裸となりて□暑さをしのぎかねたものが、一日風吹き出でてより雨となり、雨はやがて曇を交へ、外套を着ても更に温を保ち難し。(二〇、四、七)

○大阪市福島区十六町六六ノ一 島岡文三方 金森健三 和歌山県有田郡宮原村字道 宮原駅 岩淵精
山県伊都郡河根村字河根、伊都郡九度山町高野営林署 高野線高野下駅 松島政信

○ヘアランの歌の一番と二番が片カナで記される。省略ゝ

○武昌単独宿舎に入つてからの一ヶ月近い間に知り合つた者の中、和田崎と岩淵の一人が特に親しい友情をそそり出してくれた。前者は五条の産、後者は紀州有田の生れ、共に自分と同時の召集であるが、和田崎は既に遊

間余り以前に再び入院してしまひ、岩淵は今朝六四大隊の棟団へ数部隊の中の一部隊へ入つて先発してしまつた。和田崎は同郷人である上に剛腹なのが頼母しく、岩淵は純真にして且つ邪に屈しないだけの素質があり、近頃の青年には得がたい所謂真面目な型の男であり、時々放胆的な事を仕出かすのが又かへつて愛情をそそる、斯様な男である。昨夜へ彼との最後の宴として、暗がりの床上でパンに砂糖をつけ、或は砂糖水を作りながら珍しい語らいをした。但しこの砂糖たるや、その日一人が使役に雑つて糧秣倉庫でカツバラツて来たものである。

今日岩淵を送つてとたんに淋しくなつてしまつた。現在の如き自分の生活、思案もなく反省もなく読書からは斥へしりぞけられ作歌には熱意の乏しい自分の生活の中で、何かとり得るものがへ何か意義らしいものがゝあるとすれば、それは数多の兵隊の中から友とすべきものを見出しては同情、共鳴的な生活を味ふ事ではかなからう。彼一十四才、職業は自動車の運転手。そして趣味は華道。(一〇、四、一六)へここに紹介している一人についても記憶をよび起すことが出来ない。原隊追及の命令がなのままに、このあとすぐ私は又入院する。

○四月二十日遂に入院を命ぜらる。病名未定。去る十七日、英霊の使役を一日勤め、帰へり来つて少々倦怠感を覚えし位なりしが、その夜中発熱。頭痛甚しき上、口中干乾び、歩行蹣跚へまんさん・ひよろひよろ。翌十八日朝に至つて幾分か楽になりたれば、部屋長木山兵長殿に就醫方願出でしところ、受診せよとの事に、その命の儘、武漢兵站武昌医務室に赴きしに、意外入室へ医務室で療養と宣せられ、単独宿舎に帰ることなくそこに留まされり。(以上まで入室中に書きしこと。以後は五月二十三日の記)へ以上は四月二十日入院を命ぜられた時に書き出したものかへ十八日の診断の時恐らく二十九日はあつたものと想はれる。然し自覺的には左程大した

ものにも見えず、食欲も旺盛であり、其後への四十度近い時とへて、何等変るところはなかつた。翌十九日衛生兵殿が来て「お前は入院だぞ」と云ふ。医務室の規定として三日以上入室させられないし、病状は熱が下らず、病名は判らず当然入院だといふ。入院！ 又もや入院。而もこの病気は近いうちに必ず癒る自信がある。風邪の一種だらうからもう少し待つて貰ひたい。そこで、今まで長い間病院生活をしてきた経歴と追及をすぐ近くにひかへてゐる現状とを述べ、若し明朝熱が低い様であれば、軍医殿に頼んで入院を延期して貰ひたいと願ひ、やつとその承諾を得ることが出来た。ところが翌朝へ二十日になつても遂に熱は下らず、致し方なしに素直に諦め、単独宿舎からの診断患者の帰るに交つて一応宿舎に帰つた。この日折悪しく檜部隊の出発に当り、誰も病院まで送つてくれる者がなく、結局四時過まで待ち、出発は一部との事となつて、金森へ前出、外一名に付添つて貰ひ、武漢大学までやつて来た。へかなりの距離があつた。元気に歩き入院した部屋の様子も覚えている。ところが突然意識を失う。▽

今度は第二内科である。病気は大陸の風土病で「熱性病」？ではないかと云ふ。以前同室の或者が発熱して夢遊病者の様に呆けて入院し、其後同様の患者が数名も出たへという。自分は彼等より比較的受診が早かつたので、熱発しながらも元気には変りがないが、やがて彼等同様呆けてしまふのではないか？ それを恐れてゐたところ、入院した翌日、高熱患者を收容する第三班に移されへこれも覚えていたかどうか、その十一日以後五月初旬に至る間殆ど記憶に残つてゐるものがない。意識をとり戻した最初だったのか、「水をくれ」といったら、看護婦がカルピスを呉れた。それにしても武昌陸病でこんな患者をよぐも養生させてくれたものだ。▽

症を起した訳である。特に天長節の頃が最もひどかつたらしく、人の話によればウハゴトも随分と言つたらしい。此の間誰に盗られたものか、金銭、印鑑が紛失し、靴はかへられてしまつてゐた。食欲は全然なく、初め五分粥を少し食べたらしいが、後「キ汁」へ稀汁、おもゆ？をすすり、それも殆ど摂らない勝ちで、身体はリンゲルやブドウ糖の注射で保つてゐた訳。お蔭でゲツソリ瘦せてしまつた。其の後追々意識が明瞭になり出した頃、チフス菌が出たとかで、同室の者七、八名と一緒に伝へ染へ病へ棟へ移された。へ担架にのつて花のトンネルを通つた。アカシヤの花だったか。五月七日の事である。この日からはつきりと覚えがある。食事は五分粥だが全量摂れる様になり、歩行は未だ不能。注射はブドウ糖だけで、リンゲルはなくなつた。但し二内へ第二内科で受けた注射の跡が化膿し、左手二箇所を切つて貰ひ、それは未だ癒り切らない。五分粥からすぐ全粥に、続いて軟白、並食と急テンポに代へ変つて来た。食事区分はただ婦長氏の許可を得れば変へられるのである。診断区分は勿論拒送だが、何の都合か、昨日あたりから同室の者全部が護送になつたさうである。護送になつてもまだ歩けない。ヘチフスの恐しさは知らずじまい。ただ排便の苦しさがぐらいか。熱で頭髪がすっかり抜けた。ところで、はじめに掲げた経歴一覧ではこのあと五月二十四日に漢口第二陸軍病院第二分院へ転送されている。武昌から漢口へ移転の記事はないが、一覧表の通り第二分院（キリスト教の教会か学校）に移つたらしい。

○今日は六月六日。祖師へ鑑真和上を偲び奉り、遙かに内地の法要を想ふ。二日前から独歩患者となり、使役に服するうち、今日は芦の葉をよつてへないあわせて、繩を作る。片葉の芦の伝説を思つては祖師の命日に因縁づけたくなつた。（因に横で仕事をしてゐた前橋出身の男の話では、盆の十五日にはちがやを以て仏壇の敷物等

を編むとか)へ鑑真廟の芦は故国の方を向いて一方にのみ葉を伸べるといふのが片葉の芦の伝説。招提七不思議の一

▼くちなしへ原漢字の花が咲き出した。原田が執してみた花だった。患者がピンに挿し、姑娘(クローニャン)が髪に挿すので、朝毎に数多く花を見せてゐても、それらはすぐになくなつてしまふ。

▼使役に出る様になり、朝夕の体操をする様になつてから、身体の節々が痛い。然し歩行も漸次出来る様になり、食欲も進んで来た。

○岡本かの子 うつし世を夢まぼろしと思へども百合あかあかと咲きにけるかも(生死共に夢幻なれど：：)

○酒保品として刻へみ煙草が配給になり、塵紙に巻いて喫ふ。巻き方を初めて知る。

○二十日には練成班に行けると想つてゐたが、未だ体力の回復が思はしくないので、更に一週間延すこととした。現在独歩患者として種々の使役に就いてはゐるが、足の関節に力が入らず、又食欲にしても旺盛と云ふ訳にはゆかない。胃が相当弱つてゐるらしい。目まひが時々おこる。総体に倦怠感が強い。それに小便の近いことも気になる。夜分四回は便所へ通ふ。然し体重は漸次ながら増へてをり、この分ならば時日さへ経てば次第に元気になる見込はつく。(二〇、六、一九)

○総的に給養の悪くなつて行くことは時局柄当然とは云へ、この病院のそれは特に徹底してゐる様だ。運あつて内地にかへる時でもあれば、この病院を想ひ出すことも、物の有難味を知る上から云つて意義もあらうか。

へ一九三七（昭和十二）年 三 月 三 日 夜 付、四 日 午 前 消 印。卷 紙 に 墨 書、二 カ 所 に 波 と す す き 淡 彩。
今 朝 は 手 紙 あり が た り 昨 夜 は 尋 ね た が へ 原 田 不 在 で 残 念 だ つ た

時 に こ の 頃 の 気 分 は 如 何、あ ん ま り く よ く よ す る の は よ く な い、先 日 言 つ た 通 り 君 は 自 分 自 身 で 詩 才 が な い 等
と き め て か、る の は 全 く 間 違 の も と だ と 思 ふ、そ の 様 に 考 へ る の は 他 に 何 か 心 に こ だ は る 様 な 事 情 が あ る た め だ
ら う と 思 ふ が と に 角 こ ん な 話 も 読 ん で 面 白 い も の で は な い か ら 止 め る が 呉 々 も 氣 を と り 直 す こ と が 肝 要 だ と
思 つ て る 次 第

木 下 利 玄 の 夏 子 に は 素 晴 し い だ ら う へ 伊 藤 左 千 夫 の 所 謂 叫 び と は あ ん な も の で あ ら う し へ 島 木 赤 彦
の 写 生 道 も へ 齋 藤 茂 吉 の 実 相 観 入 も あ れ で 如 実 に 表 現 し 得 て る と 思 ふ 確 に 利 玄 は あ ま り 華 か な 存 在 で
は な い が 後 世 に な つ て か へ つ て こ の 人 等 が も つ と も つ と 高 く 評 価 さ れ る の で は な い だ ら う か、

う ら ぐ も る 海 の あ な た に 見 ゆ る も の 四 国 の 山 は 低 く 起 き 伏 す へ 『 水 鏡 』 三 月 号、原 田 の 詠 草 へ
こ の 歌 は 非 常 に 好 き だ こ れ で 君 が 詩 人 で な い 等 と 誰 が 思 は う 実 の と こ ろ こ の 歌 に は 少 か ら ず 感 激 を 覚 え た
先 月 の 詠 草 と し て 送 つ た 中 に

起 き 伏 せ る 国 原 溢 (は ふ) り ゐ る 雲 の 夕 べ は 北 に 流 ら ひ に け り
と い ふ の が あ つ た が 同 じ 様 な 風 景 だ が (尤 も 写 生 し た も の は 別 だ が) 恐 ら く 失 敗 作 だ と 思 ふ

今度のへこの前の日曜へ二月二十八日へは天氣が悪かつたのでへ大塚五郎へ先生はこられなかつた その二日許り前に宝池へ行つて少し作つたが どれも思はしいものがなく弱つてゐる、今度の詠草は何うしようへかへと思つてゐる、やはり旅行しなければならぬ様だが 暇がないし ちよつと出にくい 一晚どまり位なら出れないこともないが その位では面白い場所がないだらう、

しはつ山 うち越えみれば 笠縫の 島こぎ隠る 榎なし小舟

速来ても 見てましものを 山城の 高槻のむら 散りにけるかも

わが舟は 比良の港に 漕ぎ泊てん 沖へな避(さか)り 小夜ふけにけり 高市黒人

この頃 黒人がすきですきでたまらぬ 好きを所以は右の歌で推量してくれ給へ、

汝が母に 嘖(こ)られ吾はゆく 青雲の いで来吾妹子 あひ見てゆかむ

かの児ろと ねずやなりなん はたすすき 浦野の山に 月(つく)片よるも 東歌

八隅知之我が大君の 朝にはとり撫でたまひ 夕べにはいよりたたしし 御執らしの梓の弓の なりはずへ

原漢字への音すなり 朝氣に今立たすらし 夕氣に今立たすらし 御執らしの梓の弓の なりはずの音すな

り

反歌

玉きはる 内の大野に 馬なめて 朝ふますらむ その草深野 問人老

右の歌は確かに秋の歌だ 傑作!

い、気持になつて好きなことを描いてしまつたが 妄言多謝

陽はすでに 片山ぞひにかげりつつ 千鳥なくなり この青沼

吹きてゐし 風もおのづと おさまりて この山かげは 暮れなんとすも

天津日のかげりに こもる青沼は あやに青みて たたへたるかも

三月三日夜

蕪樵山人

枯魚洞主人机下

三月 八 日 付、九日午前消印。はがき。

昨日大塚先生と宝池 岩倉 深泥池へ行つた。四五日前先生の所へ添削していただきに行つたが 試験中で多分駄目だらうと思つて君は誘はなかつた。あしからず。試験がすんだら一度来たまへ。ダルマへ樋口功先生。京三中の国語・漢文を担当され、芭蕉研究にすぐれた業績がある。ダルマはニックネームが句集を出された。送つていただいたから又見せよう。

三月 二十 七 日 (土) この日の原田の日記より

へ曠平を訪ふ。マサちゃんへ女中? は帰りたる由。見知らぬ女中。野に出づ。たづねしは詩仙堂、金福寺。日の光はだららに及びて木のかげの蕪村の墓の立ちの閑けさ たそがれの野に名も知らぬ白き虫飛べるを見つつ歩み過ぎにき。この日の森田作品は『水壘』六月号に掲載。次に同誌四月号の詠草。

つくばくもなき竹やぶのはさまより伊吹の山に雪の来し見ゆ

山川の谷のはさまの青淵の底にしづきてこごし岩むら

山ふかへ原漢字。幽スイのスイ〜く時雨ふりいでてこぐらきに瀬立てる水の白き谷みゆ

この宿ゆ何処へたたん竹藪の竹のさやぐにさめてひそけし

朝あけてうす曇る陽にいささかの露をたもちてそよぐ竹やぶ

しば負ひて女は雨にぬれにけり山ふかへ原漢字〜くしてつづく竹やぶ

冬時雨にはかに強く降りいでて谷の瀬音の聞えずなりぬ

梅の花咲き静まれるこの村や橋を渡りてみちをはるけし

時雨やみて夕竹藪の梢よりしたたる露の光みてみつ

四月二十一日 付、二十一日午前消印。手紙。巻紙に墨書。

お便りありがたく拝見 あ晩はあれから先生御宅へ伺つて添削をして戴いたが 今月は思つたより悪かつた

君の今度送つてくれた いちはやく生れ出でたる：： 云々の二首はすきだ 終列車の歌もい、と思ふ 墨で書

いてある方は全部佳作と思ふが 後に書いてあるのは 僕の趣味とや、異つたものであるだけに うまさは認

めるが同感出来ない これだけは趣味の問題だから仕方がない 匂ふ処女ら といふ文句は 遠慮なしに言へば

君の最も悪い一面だらう もうそれは官能とか感覚とかの問題でなく 単なる悪趣味と思ふ 妄言多謝

楚辞を沢山書いてくれたが忙しくてよめない、ゆつくり後によましてもらふ

僕なんか歌が不評判でもあんなまり苦しまない、何故と言つても それは他に苦しむべきものがあるからだ、自

分の本分を忘れることは僕等の様な仕事を持つてゐるものにとつては自殺に等しいからだ

先日も大塚先生が 君は気が多すぎると原田君と話したことだつたと言はれたが 先生すら僕の気持が分つても
らへないのかと悲しい気もちがした 色々のことをやつてはゐるが それによつて自分の本分を忘れたことは
度もない すべて 自分の仕事の合間にやつてゐるのだ

寢室へ這入る時間を三十分後らす、三面記事の心中なんかを読む時間を節約する、無駄口をた、いてゐる時間
歌を作る、殊に仕舞なんかは精神的な向上を計るためにやつてゐると言つてい、だから現在の生活には憂愁は
あるが張り切つた生活をしてゐる、

だから 僕の習つてゐることは 嫁入前の娘が何でもやつてゐるのとは訣が違ふ それが僕は認めてほしいのだ
尚 その上 茶も習ひたいと思つてゐる位だ 色々つまらぬことばかり書いてしまつたが この位で失敬する
歌は出来ぬ 目前の仕事が忙しいから 大雅の幅を買つた 一度みに来たまへ 二〇日 田蕪樵

原田枯魚君 乱筆多謝々々

『水蓮』五月号詠草。

樵唱

雑木山山木をきると集ひたる男をんなの唄ふひそけく

声ひくく男をんなの唄ふ唄山ふかぶかと昼ぐもりたり

うつろなる音たてて散る葉もあれどなべて櫟は芽を揃へたり

ほうけたる芒もいまだ見えてみつ櫟新芽の山の日だまり

まろみつつ櫟の新芽色づきてまさにかん山の閑けさ

向つ山のその山の秀ゆ生れ出てたゆたふ雲か降りしづみつつ

との曇るこの春空に澄み入りてかんかんふかへ原漢字へし山の斧の音

隠沼

陽はすてに片山ぞひにかげりつつ鳩なきつぎぬこの青沼

隠沼に木こり木をひく音さへ原漢字へえてわづかに暗し陽はかけりつつ

吹きてあし風も自(おのづ)とをさまりてこの山かけは暮れなんとする

馬酔木咲く

咲きそめてはつかに白き馬酔木かな片山かけにそよぐその花

雑木林に混りて白き花のいる馬酔木のうれば深くたれたり

山の上の保養所へ行く切通し赤埴みちに心いたみぬ

はがき連句・デ

ル

ダオ

ー

(続)

水六・原田昌雄
櫟齋・原田憲雄

二十三日の夜は、ひさしぶりにゆつくりお話が伺へて楽しいことでした。その折のご様子から奇句出現は推察されましたが、予想をしのぐ麗々たる貴句に、花はかういふあしらひ方もあるものかと三嘆。もつとも付ける身

は四苦八苦、名残の折立は殺刺とと願つてをりましたのに、はじめから竜頭ならぬ蛇尾、おはづかしいことです。

尻からげ帯に御室の花挿して

六

ポートルレースを見る爺と婆

櫟

竜となるあてもなき蛇穴を出で

〃

押しつまり、掃除などに手をとられ、なかなか勉強の方は進みません。一九八三年十二月二十七日 櫟

宇宙やは身のうちの渾沌

六

二句つづけるのは難しいところのあるものですが、さすがに面白い移りゆきで、文句の付けやうもごさいません。(ただ、どうも「蛇」は当初からこゝで出て来ることになつてゐたのではないかといふ疑ひはありますが。)拙句は、その外へ出ての戸迷ひを少し大袈裟に言つた訣ですが、折立の貴吟の勢ひにつられて了つたやうです。この分では名残は、初折の調子とは大分違つたものになりさうで、うれしさと怖れに身ふるひしてをります。これが今年の最終便となりました。どうぞ吉い御年を。十二月三十日 六

時計屋に暦あづけた愚かさよ

櫟

荘大な形而上学が幻出。これに対抗するにも、南華真経を持ち出すわけにはゆかず、アリストテレスを勧請したのではあなたの笑ひを誘ふのが落ち。二つの軸で宇宙を計らうとする曲者を時計屋に見たてました。なほ、折角のご推察ながら折立ははらみ句ではありません。むかし「蛇尾山房」といふ室名を使つたことがあります。いまならびつたりですが、付きすぎで、ご覧になる方でシラケてしまひませう。歳時記を繰つてゐたら目につい

て、目についたら結びついた、といふ「身のそと」の蛙の卵のやうな出来さまでした。一九八四年一月四日櫟

剣の舞につら、折りとる 六

遣句を作るのは余り好きではないのですが、こゝは何とか「早梅」の語で遣り過ごして、手をお渡しするつもりでをりましたところ、きのふは句の出来に釈然としないまゝ、寝てしまひました。振り返つてみますと、「御室の花」が遅咲きであり、こゝに早咲きの梅では芸の無さが歴々でした。「時計」から得た「剣」で意想をパッサリ断ち切つてしまひ、以て遣句に代へようとしたのです。（時計屋が舞ふのだといふことになるかと存じます。）
一月十日 六

ジャンヌダルクも伴天連もみな焙りあげ 櫟

ハチャトリアンの「剣の舞」を聞いてゐるところへ貴簡をいただき、尊句にそつくりそのまま吟詠されてゐるのには全く驚きました。時計屋が舞ふのだつたら「ベトルーシュカ」を伴奏に使へるかも：と、ついでにそれも聞いてゐると、寒い部屋に眠りがおそつてきて、何もかもごちやごちやになつたまま朦朧とし、ジャンヌやバテレンが火あぶりの刑になつてゐるのを見ながら大衆が暖をとつてゐるところで目がさめました。移り工合のことはとにかく、この夢を記念して拙句。独り合点で恐縮ですが。一月十三日 櫟

赤ならこれに限るなどいふ 六

きのふけふと非道い寒さですが、暖のとり方にも色々あるものだと思ひました。魔女裁判から何故かドラキュラを連想し、確か彼（？）の嫌ひだといふことになつてゐるニンニクから、「悪臭」が纏ひついて離れなかつた

のですが、どうもそれは「焙りあげ」からも来てゐるらしいことが分つて、やつと「何て奥ひのひどい食堂」の句になりました。けさになつて、「焙りあげ」から「奥ひ」では余りにも直接的に過ぎることに気づき、前掲の如く変へました。(幸ひ、酒の句は未だ出てをりません)昨晩は人間の天麩羅のことなども考へに浮んで、これは貴句の「天」と「あげ」から来たやうです。一月十九日 六

真珠こめし標の壺を捧げむか 櫟

人間の天麩羅といふのは奇想天外ですが、石川五右衛門なる先例をわが日本人はちやんと遺してくれたやうです。それをさかになに葡萄酒、との趣向は、オマル・ハイヤームの詩にふさはしい気もしますが、相憎その集はどこへ放りこんだのやら。やむなく手許の昌谷をめぐつてみたら「小槽酒滴真珠紅」また「標粉壺中沈琥珀」。毎度長吉では其のない話ですが、芥川竜之介・陳舜臣が引いてゐる点ではもはや辭典のそしりもあるまいと、例のつぎはぎ。ただしこれまた、もとの歌の季には関はりなくその物自体。でも恋を待つには足りませうか。一月十九日 櫟

あまさねばよきあ、君のみます 六

「つぎはぎ」といふのは御謙遜、お話を伺はなければこれが李賀の句から来てゐることなど分らぬくらゐ自然な詠みぶりと存じます。酒姫(サーキイ)のことにしてあるやうですが、恋の前ぶれとすれば「真珠」は「真ごころ」となりませう。純真な乙女がいざ相手に渡す段となつて胸がドキドキしてゐるところです。もう酒席ではないのですから、壺は贈物か何かです。一月二十一日 六

はたと途絶えた口説を猫のせみと打ち 櫟

貴吟、小説的展開ですこぶる妙。こちらでウエルテルあたりを出すべきでせうが、ジャンヌの手前遠慮して、

三、四十年前の恋人の訪問をうけた老人、なほ艶色消えぬ相手に心そよめかせたところ、ついさきごろ死んだ夫といふのが、かつて己がそむいた師と知つて：：といつた筋書を考へたものあまりにも通俗。筋書はご破算。

ええい、これもこいつのせみと膝の猫をひつばいたいたら、そいつはのつそり出てゆく。といつたところでいかが。ぢぢむさいのは日本の自然主義のせいにしたいのですが。 一月二十三日 櫟

捨て、のちさへしやぶりつく骨 六

なんと因業な、といふことを言つただけの句になりました。小説の筋書は面白いと思ひますが、「猫のせみ」のところは全く読者の想像に委ねてあるやうでもあり、或ひはそれより単に当り散らしただけ、といふのが本当らしくもありません。名残に入つてからはどうなることかと惑ひましたが、まア何とかなるものだと、少し早いかも知れませんが、一息ついてをります。油断大敵。 一月二十五日 六

キヒョン響き三角の月さまよへり 櫟

ねばりつくレアリズムをこらで突き放したいと思つておたらぶつかつたのがこのへんてこ。ご存知のやうに「いすのき」の異名、金縷梅科の常緑喬木、七、八メートルに達し、梢枝の葉の面がふくれ、中に虫が棲み、秋になると虫は孔をうがつて飛び去るが、空殻はかたく、吹けばよく鳴るので、ひよんの木とか猿瓢とかいふ由。わたしにはそれよりキヒョンといふ音が面白く、その釣合上、円い月では申訳なく三角にした、といふところで

す。解説をつけるのは邪道ださうですが、拙句は解説で辛うじてつながつてゐる気味で、お付合ひ下さるご迷惑、察するに余りあり。でもどうやら名残の裏に近かづきました。一月二十七日 櫟

人魚ただよふ洪水の国 六

なるほど、これは珍らかな音で、一度実際に聞いてみたいものと思ひますが、或ひは、それよりも日本語の五十音に写し取つたこの音のはうにこそ興趣があるのかも知れません。拙句は当初、「人形うかぶ洪水の村」だつたのですが、これはテレビニュースの一コマのやうで折角の転回にブレーキを掛ける恐れあり、一寸デフォルメ致しました。貴句を颯風の眼のをりの景と見てゐます。「三角の月」は乱視の颯風だつたのでせう。三十日 六

斑鳩も寄り来ぬ庵の障子かへ 櫟

雪が降り、晴れたかと思ふとまた降つて、ひねもす謎め、夜もすがらしづれを聞きながら、雪の句ひとつ出ないのはわれながら笑止。そこへ雪女ならぬ人魚がただよつて来ようとは。表の暴風洪水は、こゝらでをさめどきかと、おとなしく障子を貼りかへてみました。さて、どんな絵を描いてくださるか楽しみです。二月一日 櫟

禁制品の蔵に了はる 六

表向きは佻びた風でも裏へまはるとさあどうか分らないといふ句意ですが、小生は「花前」までは波乱があつたはうがい、との浅ましい考へを持つてゐるので、こんな句が成つたのでせう。絵はやはり「花」のところを描いていただくのが最上と思ひます。障子を透しての雪明りは格別ですが、小生など、雪の句を作るといふこと自体、全く考へつきもしませんでした。その癖、連句に雪の句を入れることには大変執着してゐるのです。二月

六十にして惑ひ惑ふことの面白く 櫟

貴意により破格を嫌はず。豪傑なら海賊船を仕立てて呂宋・かんぼちやへ、高僧ならろばを引いて羅馬へ、といつたところでせうが、気の小さい老人、ピアノを習ひ始めては放り出し、梵語の独学でアシユヴァス、アシユヴァ、アシユヴァム、アシユヴェーナ：などと冷や水を汲んである趣き。昼下りの雨はやまぬとの諺が、ここにも通用すればよいのですが。昨夜から今朝にかけての寒さは格別で、雪さへちらつき、花がはたして開くものやら甚だ心配。 二月七日 櫟

あどけない児のさりげない歌 六

句は元よりさりながら解説文が面白くていつも楽しんでをります。小生も不惑を数歩先にひかへて太極拳を習ひ出しましたが、以前に社交ダンスやヨガ、近くジャズダンスをやらうかなどと、いつ迄こんなことを言つてゐるのでせう。ところで拙句は何でもない歌の一節がもとで「惑ふ」ことにするつもりが、かうして並べてみると大した因果関係は感じられないやうでした。 二月九日 六

丘陵に咲きほこる花ジャズダンス 櫟

貴句にはウィリヤム・ブレイクの「無垢の歌」が思ひ浮かび、天上に昇りたくなるのですが、それが小生のわるいくせなので、テレビのこども番組によく出てくる花の丘といふことにして、お手紙の「ジャズダンス」をくつつけただけ、といふ芸のない絵になりました。ともかくもわたしの分は了り、すばらしい華句を待つばかり。

二月十一日 傑

額ほどよくぬぐふ春風 六

これは何とも若々しい句を戴きました。パッと目の前が開けるといふのはかういふ時のことでせう。「咲きほこる」がこの一巻の眼目となつたやうで、カタカナも丁度ほどよい処に出たのではないかと存じます。小生は仲間「ほどよく」どころでなく、今回は全く冷汗ものが続きましたが、終りまでお導きいただき有難うございました。東京の友達数人と百韻をやらうかといふ話をしてをります。やれば一年がかりで悠長なことです。果してどうなりますことか。 二月十三日 六

※前号18頁11行、氷六氏の文中「月出づる裾野へ人の月円か」は「月出づる裾野へ人の背に円か」と訂正します。わたしの誤記でした。執筆。

連 句 ・ し ぐ れ 原 田 憲 雄
め ぐ み

初オ しぐれ来てやがて霽れゆく枯野かな 憲 窓のべにソネット訳す居待月 憲

光りあたらし白き寒菊 め 闇にとだえるこほろぎの声 め

ザンギリの頭に駕籠を打捨てて 憲 初ウ 軍服の案山子あざけり烏飛び 憲

遠く望める西欧の国 め 嫁がぬままに先立たれたる め

夢さめて毛脛のしびれすさまじく

琵琶の曲かたる老女の眉帯で

カラオケ響く露地のあばらや

「個人教授」の深い傷痕

御落胤と噂せらるる針医住み

縷帯をターバンよりも艶に巻き

子猿を肩に読むかはら版

くすぶるかまど灰のぬくもり

関羽悲槍荊州城に月昇る

牛繫ぐ杭一本の月の庭

沢迷ひきて逢ふ夏あざみ

雨を横ぎり消ゆる鯉躰

草庵を脚絆もつけず出づる僧

名ウ 海に向かふ丘躰ればれとカンナ咲く

ガラスに写るわがニューモード

笑ひさざめく子どもらの歌

限りなく花散り群衆流れつつ

過ぎし日よ水車は高く天めぐり

都の春を惜しむ夕暮れ

浮島にいま物影もなく

名オ 蜆船これではまひの筈おろす

見渡せば若木もまじる花の杜

割れた壺から悪魔一匹

鶉となりし鼠をかしき

こはいかにイワンの馬鹿のしたたかさ

田畑売つて世界漫遊

興行 一九八三年十一月十七日より

雪の坂ころげて帰るランドセル

一九八四年三月十三日まで

水鳥ついとこちら見てゐる

五代は、唐と宋という一大朝廷にはさまれた約五十年に諸国が乱立した時代だから、歴史の教科書では数行で片付けられる。詞の歴史からいえば大切で、話柄にも欠かぬ。しかし、ここでは、李清照の詞論が主題なのだから、すべてはしおって、次に進む。

わが宋の朝廷が成立して、礼楽・文武は大いに備わり、百余年、さらに涵養され、詞において始めて屯田員外郎の柳永なる人がいて、旧調を変化し新調を作り『樂章集』を出し大いに世に名声を得た。音律は協和したが詞の内容表現は俗っぽいものだった。また張子野、宋子京兄弟、沈唐、元稹、晁次膺などの連中が次々に出て、その時々ですぐれた表現がありはするものの部分的なもので、名家とするには足りぬ。

柳氏の生卒年は不明だが九八〇年代後半から一〇五〇年代のはじめごろまでの人。次に名の出る張先、字は子野（九九〇—一〇七八）。この二人は後に触れる晏殊（九九一—一〇五五）、歐陽修（一〇〇七—一〇七二）とともに宋詞開花期の四大詞人と目される。その張氏を含めて「名家とするには足りぬ」といい、続く論においても男性諸大家をなでぎりするのだから、女のくせに生意気な、と大いに憎まれることになる。批評に男も女もありはしない。しかし二十一世紀に近づいた今日だって、女の人が男の作家や批評家をなでぎりしたら、評判は悪からう。へたするととんでもない仕返しをされるかもしれぬ。そんなことはまあどうでもいいが、ここで彼女の詞論の性質について、説明しておく必要がある。

彼女の育った家庭は、男も女もみな読書家だった。しかも当時の最高の知識人級の。きかん気の彼女は、二十歳くらいまでにはその人たちに劣らぬ読書家になっていた。われわれがかり勉で手に入れるような知識ではなく、好きで好きでたまらずにする読書、したがって彼女のなかでは古典が感性となっていた。すぐれたものと、そうでないものとは、舌にのせれば一滴の水でも、水道の水か井戸の水かがわかるように判ってしまふ。詩であれ散文であれ。そのような感性は、批評の基準を自らの内にもっていて、作品に対するとき、基準に達しないものはふるいおとしてしまう。作者がいかなる人であるか、などには関わりなく。彼女の批評は、ジャーナリズムからは速く、作品そのものの価値のみを問題とする。詞論における彼女の批評は、だから、詞だけを詞の歴史のなかだけで論じているのではなく、彼女に至るまでの中国文化全体を基盤として、新しいジャンルの詞がどれだけのことを達成しているかを論じているのだ。これこそ、一十世紀の今日、どこへ出してでも通る、「批評」というものではないだろうか。もちろん、彼女の下した判断が今日からみて全く訂正の要がない、などというのではない。しかし、彼女の批評ほど本質的な普遍性をそなえる詩論は、中国の詩話類にはそう多くあるまい。たいていは、ジャーナリズムによわれている。わたしがここでジャーナリズムというのは、官僚としての位階や、文壇での地位や等々を顧慮する視点を指す。

彼女の批評はジャーナリズムから見ればきびしすぎようが、きびしいその批評に名が見える詞人は、詞作品において「古典」としての達成をとげたことを認めた上での褒貶がなされているのである。このことが、今の中国の学者や批評家にも、必ずしもよく理解されているわけではない。もちろん中国だけではない、学問や批

評もジャーナリズムを克服することはなかなか困難なことであろうから。さて柳氏の「菊花新」

カーテンをしめようとして待ちかねた口説／きれいな眉が八の字になり嘆くのは夜の短かさ／若い男をせきたてる／先に寝て／おふとんを暖めといて／やりかけの針仕事すぐ放りだし／スカートぬげば／しどけな
さ限りなし／ベッドの灯つけたままなは／しょっちゅう男のかわいい顔を見ようため

年下の愛人をむかえた女のねっとりした媚態。来ようが遅すぎたといつてすね、「あたしゃ忙しいんだからね」と男をベッドに追いたてたあと針仕事などしてみせても、すぐに放りだして男の胸に駆けこむさまが、短い一篇のうち活写しつくされる。夫の留守に若い番頭を引き入れる商家の女房の趣きもあって、この詞をむかえた当時の人は「春色梅ごよみ」を争い買った徳川の民衆のように熱狂した。侍たちも「梅ごよみ」を手文庫の底に秘めたように、宋の士大夫も口でけなしながら愛誦した。「菊花新」はありふれた詞調だが、ありふれたその形さえこれほどの新味を盛り得るものとは誰も思いもかけなかった。そういう驚きが彼女を撃つたに違いない。次に「定風波」春になっても／みじめな緑さびしい紅／季節をたのしむ気になんぞなれやしない／花の梢に日がさして／柳の糸を鶯がくぐっても／ふとんをだいてねるばかり／肌のつや消え／髪みだれ／いちにちうつうつ身づくろするのもしやだ／どうしようもない／あの薄情者いったきり／便りもよこさぬ／こんなことなら／はじめに鞍にカギかけて／勉強部屋に／ノートとペンだけわたして／閉じこめとけばよかった／いつもいっしょに／ほっときゃしない／あのひとのそばでしずかに針仕事／わたしと／若い年月むだに過ごしはしなかったのに

これは、一般に「定風波」と名づけられる詞調とは全く違った形式で、柳氏の創作らしい。こういう詞の作者であるお蔭で「井戸のある所」でならかれの詞が口ずさまれ、またそのお蔭で官吏として出世しなかった。李清照は、柳氏の詞から学ぶべきものはちゃんと吸いとっている。その上で「俗っぽい」と批評した。俗っぽいところがいいところ。詞は、もともと俗より出でて俗を身上としたものだ。それには違いない。ただ、俗もつきつめてゆけば、奥行きはいくらでも深まってゆきうるものである。この人ならばそれができるはずなのに、といつた無限の期待が、彼女にきびしい評語をはき出させる。彼女はおのれの作品において評語を真実と認めさせるだけの仕事をした。「生意気な女だと思ったが、おまえさん、やるね」あの世に彼女を迎えた柳氏は、そういつて笑ったのではないだろうか。

一九八四年四月六日

※おわび 本号3頁12行「まんさん」にあてた漢字は、手持活字にないため間違いました。

「唐の太宗」補遺 (李賀雑記)

三月三十一日、王之春『椒生隨筆』を讀んでいたら巻四「詠太宗」と題する次の文章にぶつかった。

友人詠唐太宗云「穉兄殺弟納弟婦、此人直無一好處、史冊彰彰究何故、由來誼辭數貞觀、古人人豈不大誤、

試看君位篡皇隋、功歸于己罪婦父、昭陵獻陵欠分明、知望其妻不望其母、君不見、果報昭然、偽臨朝武」

此真是太宗實錄、句亦奇崛、(一九八三年・長沙・岳麓書社刊)

王氏の評語には全く同感。ただ「友人」の名を記さぬのがなぜか。王氏は一八四二—一九〇二左右の人。